

37. 20200220 梅の話アラカルト

1. ウメの渡来

ウメは、バラ科サクラ属の植物で、植物学的にもサクラに近い存在である。またどちらも日本の春を代表する花だから、日本に固有の植物のように思われがちだが、ウメは、中国から渡来したらしい。中国の雲南省・四川省・湖南省あたりが原産地とされる。それが7世紀頃に日本に伝来した。

したがって「万葉集」にはウメを詠んだ歌がたくさんあるが、それらの歌が作られた天平時代(8世紀)より、時代を一步でも遡ると、もう日本国内に、ウメはほとんど見られなかったものと思われる。日本最古の文献である「古事記」や「日本書紀」(いずれも8世紀はじめ)にウメが登場しないのは、そもそもウメが日本になかったからに違いない。

ウメを愛するのは日本より中国が先輩である。また日本ではおめでたい席に欠くことのできない「松竹梅」も中国から伝来したもののようだ。

ウメは日本に伝わるとすぐに詩歌にも取り上げられた。それは、その花に人を惹きつける魅力があったからに違いないであろうが、中国の詩文に感化されたという側面も忘れてはならない。

”人ごとに折りかざしつ遊べども いやめずらしき梅の花かも” (めいめいに髪にさして遊ぶのだが、ますます心惹かれるウメの花だなあ、の意。)730年(天平2年) 大伴旅人邸での梅花の宴で詠まれた。中国の文人趣味の影響も受けながら、急速に日本人に受け入れられていったのである。

「万葉集」にウメを詠みこんだものが百余首もあるが、ほとんどが白梅で、紅梅はまだ普及していなかったとも言われる。ウメといえば白梅という状況に変化が現れるのは10世紀も半ばごろからである。

“東風吹かばにほいおこせよ梅の花 あるじなしとて春な忘れそ”

(大宰府に流されることになった菅原道真が、庭先のウメを見て、やがて春風が吹くようになったら、風に乗せてその香りを大宰府まで届けておくれ。あるじがいなくなったからといって、春を忘れてはいけないよの意。)

2. 梅から桜へ

「枕草子」に至って、「木の花」として紅梅の次に挙げるのは桜である。白梅は出てこない。寒い中で咲く清楚な白い花から、暖かく華やかな感じの紅やピンクの花に、時代の好みが変わってきているといえよう。

「万葉集」には桜は約40首に過ぎなかったが、「古今集」になると、春の歌130余首のうち、百余首に桜が歌われている。ウメは20首に満たない。ウメとサクラの地位が完全に逆転する。

以上

(寺井 泰明教授の著作からの引用による)

